

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-01

## 国際ラウンドテーブルセッション：学図書館はなにを目指すのか サービス・学習支援・リエゾン

法政大学, 図書館 / HOSEI UNIVERSITY, Library

---

(発行年 / Year)

2008-12-04

国際ラウンドテーブルセッション

**大学図書館はなにを目指すのか・・・サービス・学習支援・リエゾン**

---

法政大学図書館

2008年12月4日

## はじめに

12月4日（金）13：30から17：30まで、法政大学九段校舎3階遠隔講義室で、法政大学図書館はWASHINGTON 大学 Odegard 図書館 Jill McKinstry 館長を招き、国際ラウンドテーブルセッションを開きました。テーマは「大学図書館はなにを目指すのか・・・サービス・学習支援・リエゾン」です。

「サービス重視」「学習支援強化」、したがって図書館員と学生・教員との関係を強めようとする「リエゾン構築」は、21世紀の図書館にとってもっとも重要な課題です。法政大学図書館は、三つの課題の解決に取り組んでいますが、的確に進めるには米国の先端的な事例を知ることが有益です。しかも三つの課題は、大学図書館に共通する課題であるため、セッションには協力関係にある山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム加盟館の皆様に参加していただきました。

当日は、「THE 21<sup>ST</sup> CENTURY UNIVERSITY LIBRARY：EXPANDED SERVICES, WRITING & RESEARCH ASSISTANCE, CAMPUS PARTNERSHIPS」と題し、McKinstry館長が有益で刺激的なプレゼンテーションを行ってくださり、活発な質疑応答と意見交換が行われました。



## 参加者

機関	氏名	役職	セッション	オブザーバー
青山学院大学図書館	佐藤尚子	図書グループ課長		○
	伊藤義裕	図書部運用課長	○	
	中田眞江	図書部運用課閲覧係長		○
	有蘭聡美	図書部運用課参考係		○
学習院大学図書館	鈴木宗一	次長	○	
	倉持仁志	整理課長	○	
	石井博幸	事務長（法経図書センター）		○
	山脇 治	主事補		○
東洋大学図書館	井上博文	図書館長	○	
	伊藤祐二	図書館事務部長	○	
	田中 徳	図書事務課長		○
明治大学図書館	吉田正彦	図書館長	○	
	菊池亮一	図書館事務長	○	
	平田さくら			○
	矢野恵子			○
明治学院大学図書館	松岡良樹	図書館次長	○	
	秋山美佐子	図書館利用サービス・電子情報課横浜利用サービス係		○
立教大学図書館	牛崎 進	事務部長	○	
	小泉 徹	新座図書館課長	○	
	小坪 守	利用支援課係長		○
	小林数彦	学術資料課係長		○
法政大学図書館	公文 溥	図書館長	○	
	前川 裕	市ヶ谷図書館長	○	
	丸山 悟	図書館事務部部长	○	

## プレゼンテーションと質疑応答

**司会（丸山）** お待たせいたしました。時間になりましたので、ラウンドテーブルセッションを始めます。私は進行役を務めさせていただく、法政大学図書館の丸山と申します。よろしくお願いいたします。まず本学の図書館担当常務理事の徳安が開会の挨拶をいたします。

**徳安** 皆様、こんにちは。法政大学の常務理事、徳安と申します。まず、本日、ラウンドテーブルセッションのためにアメリカのワシントン大学からお越しいただいたジル・マッキンストリーさん、どうもありがとうございます。本学を代表して、お礼を申し上げます。ラウンドテーブルセッションのために内容の濃いご報告をいただけると聞いておりますので、よろしくお願いいたします。

それから、本日の企画に際して各大学からお集まりいただいた図書館関係の皆様方、どうもありがとうございます。これから図書館は大学の研究者のためのものだけでなく、大学で学ぶ学生、大学院生のために広く利用されるべきものとして、教育のためのファシリティとして活用されていかなければいけません。

日本でも大学全入時代を迎えたことから、つまり大学がユニバーサル型の大学になったことから、そのような図書館の使命はますます重要になってきたと考えています。

本日はマッキンストリーさんともどもラウンドテーブルセッションということですので忌憚のない議論をいただいて、各大学の図書館のより一層の発展のためにお役に立てればと思います。よろしくお願いいたします。簡単ですが、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

**司会** それでは始めます。まず、参加者の自己紹介をお願いします。青山学院大学の伊藤様から順番にお願いできますか。

**伊藤（義）** 青山学院大学図書館の伊藤と申します。現在、閲覧参考の運用業務の課長を務めています。よろしくお願いいたします。

**倉持** 学習院大学図書館で整理課課長をやっております、倉持と申します。よろしくお願いいたします。これからうちの鈴木次長が少し遅れて参りますので、また改めてよろしくお願いいたします。

**井上** 東洋大学の井上です。現在、館長を務めさせていただいています。学部は、国際地域学部の教員をしています。どうぞよろしくお願いいたします。

**伊藤（祐）** 東洋大学の伊藤です。図書館経験はまだ4年の未熟ものです。よろしくお願いいたします。

**牛崎** 立教大学図書館の牛崎と申します。1980年に1年間、ワシントン大学のイーストアジア・ライブラリーのビジティング・ライブラリアンでした。当時のヘッドはカール・ローというチャイニーズの方でしたが、いまはもう少し南のほうに転勤されているやに聞いています。

非常に懐かしく、レーニエ山とか、あの当時は魚屋さんでは魚が飛んでいませんでしたが、非常に懐かしい。私どもの職員が2人、3週間ほどお邪魔したことに感謝申し上げます。

と思います。どうもありがとうございました。今日は楽しみにしています。ありがとうございます。

**松岡** 明治学院大学の松岡と申します。本学の学生数は約 1 万 1000 名、二つの図書館で 117 万冊を蔵書しています。よろしくお願ひします。

**前川** 法政大学の前川です。市ヶ谷地区の図書館を担当しています。国際文化学部に属していて、専門は比較文学です。よろしくお願ひします。

**公文** 法政大学の公文です。図書館長をしています。私は学部は社会学部で、国際経営を担当しています。今日は、マッキンストリーさんから大変有益なお話が聴けるのを大変楽しみにしています。どうぞよろしくお願ひします。

**司会** 法政大学図書館事務部長をしております、丸山と申します。よろしくお願ひいたします。

**マッキンストリー** 皆さん、こんにちは。今日、この場で皆さんとお話しできることを大変うれしく、光栄に思っております。法政大学図書館および紀伊国屋書店の皆様、私の来日を実現してくださったことを感謝申し上げます。私はこの場に来ることができて本当にうれしく思いますし、皆さんのすばらしいホスピタリティに感謝しています。

皆さんの中にはワシントン大学を訪問された方もいらっしゃいますが、そういった方と再会できたことを大変うれしく思います。これからシアトルに来る方がいらっしゃったら、いつでも歓迎しますのでどうぞいらしてください。

おそらく皆さんの中には、昨年こちらに来た私どもの上司、ベッシー・ウィルソン館長と会った方もいらっしゃるのではないかと思います。今日の私のプレゼンテーションの中に彼女がしたプレゼンテーションとかぶるところがあるかもしれませんが、その点をご容赦ください。

今日は、演題として「21 世紀の大学図書館のあり方」についてお話しさせていただきます。学生や図書館利用者が最も必要とするものを提供するために、どのような図書館をつくっていかねばいけないかという点です。

学生は、拡張されたサービスや革新的なスペースの利用を望んでいます。学生が論文を書くとき、研究を行うときにどのような手助けができるかも考えていかねばいけません。スピーキング、技術のスキルが向上するためにアイデアを提供し、一番重要なことは、図書館外に手を延ばしてパートナーシップを組み、サービスを強化していくためにどのようなことをしなればいけないかについてお話しできればと考えています。

私は今日、この場で、図書館のミッションは何かということからお話ししていきたいと考えています。図書館が私立だろうが公立だろうが、新しい図書館だろうが古い図書館だろうが、私たちのミッションはすべて共通したものです。

そのミッションは何かというと、人々と知識をつなげることによって生活の質を向上させ、知的な発展を促進していくことです。私たちの役割は、ものを収集するところから、人といろいろなものをつなげていく役割にシフトしてきています。

それに関して、アメリカにはとてもよいニュースがあります。アメリカで新しい大統領に選ばれた方は、大変図書館を愛している人です。彼は私どもの国の最高峰の大学で教育

を受け、図書館が彼の成功に大変役に立ったと公言してくれています。

こちらの写真は、2005年の図書館カンファレンスで私が撮ったものです。バラク・オバマはイリノイ州選出の上院議員でしたが、いかに図書館が大事で、フィクションの本はノンフィクションと同じくらい、またはそれ以上に大変重要なものであると話してくれました。彼がそのとき、フィクションは感情的な、エモーショナルな真実をより多く語るものですが、そういったものからより多くを学んだとおっしゃっていました。図書館にとって、大変いい時代を迎えることになります。

シアトルについては皆さん、おそらくよくご存じだと思いますが、一応地図を持ってきました。私どもは環太平洋地域の東海岸にあたり、皆様は西側です。シアトルと日本の関係は、100年以上も前から続いています。シアトルは、アメリカの都市として初めて日本と貿易関係を結んだ都市でもあります。

なぜかという、船で移動する場合、日本の港からワシントン州の港まで13日かかりますが、13日という日数は南カリフォルニアの港に行くより30時間早いのです。こちらの写真には、レーニエ山が見えます。昨日、富士山を拝見しました。日本の天気よさに感謝したいと思います。すばらしい景色を、ありがとうございました。

もう一つ、シアトルと日本をつなげるものはイチロー選手です。日本からシアトルへの一番大きな野球の贈り物、それがまさにイチロー選手です。彼はその優雅さ、スポーツ精神、高潔さによって、シアトルの人の心をわしづかみにしました。しかも、ドン・ワカマツ氏は、アジア系アメリカ人として初めて、メジャーリーグチームの監督になりました。こういったことが起きているのです。

シアトルは、ご存じのようにマイクロソフト、Amazon.com、リアルネットワークス、スターバックス、ボーイング、そして多くのバイオテック産業などに囲まれています。加えて、ビル&メリンダ・ゲイツ財団はシアトルに拠点を置いています。ビル・ゲイツとともにマイクロソフトの創始者だったポール・アレンも、図書館の大きなサポーターです。東京には東京タワーがありますが、シアトルにはスペースニードルがあります。

では次に、私が所属しているワシントン大学についてお話ししていきます。ワシントン大学は創立147年、キャンパスは三つあります。1990年には、ボセルとタコマに新しくキャンパスをオープンしました。私どもは大変大きな公立の研究大学ですが、上海交通大学が発表した世界大学ランキングで16位にランクインされています。

昨年、ワシントン大学は10億ドルの公共、民間の研究費の契約をしました。そのようにして、私どもは研究を中心に据えています。助成を受けている研究分野で大変強いのは、工学、技術、林学、航空宇宙、海洋科学、医学、生物化学です。

このように、ワシントン大学は研究によって牽引されている大学です。大変重要なのは、研究が大学を牽引している場合、どのようにして図書館に資金を得るかの戦略をきちんと考えなければいけない点です。

ワシントン大学では、4万1000人の学生が学んでいます。法政大学と似たような数字になりますが、学部生は2万7000人ほどです。大学院生は1万人以上、残りの1800人が法科大学院やメディカルスクール、ビジネススクールの専門学生です。

ここに特記すべきは、ワシントン大学の多様性です。入学する学生の4分の1は、実は経済的に不利な環境にある家庭から来ています。今年入学した学生の3分の1にあたる5540人は、一家で初めて大学教育を受けることになった学生たちです。ワシントン大学は、この事実に変え誇りを持っています。

次に、図書館です。世界でも最大規模を誇る図書館で、いくつかの図書館によって構成されています。蔵書は700万冊以上、5万以上の逐次刊行物のタイトル、その他のフォーマットの蔵書があります。

一番上の写真は、スザロの読書室です。大変エレガントで、ゴシック調で、大聖堂を思わせる読書室です。ときどき隠れに行きます。スザロの図書館は1926年に建てられましたが、それに加えて1990年には、ポール・アレンの名前を取ったアレン図書館ができています。

次に、図書館のスタッフです。図書館職員に専門家を加えて、総勢165人のスタッフがあります。図書館員は、図書館情報学に関連する修士号を持っています。また、サポートスタッフとして学生を500人採用していますが、雇っている学生の数は私どもが最大と言えるかと思います。

私たちにはビジョンが必要です。ビジョン2010というものをかたちづくりしました。手短かに言うと、このビジョンは国際的なリーダーになることを目指しています。私たちは物理的な場所、知性を提供する場所でありたいと考えています。

私たちの大学は大変多様性に富んだコミュニティを擁していますが、その中でどのような情報が必要なのか、それを的確にとらえることを目的にしています。学生が人生で成功を収めることができるように、成功者としてグローバル市民に育てていくために、必要なサポートを提供していきます。これは大変積極的な役割で、受動的な役割とは異なります。

こちらの写真は、学生がつくった絵画で図書館に飾られています。芸術コンペで賞を取った作品です。この絵画から見て取れることですが、テクノロジーを使うことによってグローバルな次元に手を伸ばしています。そして、リソースを取ってきたら、今度はそれを発信していく。そういったことを示した絵でもあります。

ワシントン大学の図書館には、25の施設があります。先ほどスザロ図書館、アレン図書館についてはすでに言及しましたが、こちらの右上の写真を見てください。これは島にあります。フライデーハーバーというところにある研究図書館です。左側には、ボセルとタコマキャンパスが載っています。

実は毎年、新年には、図書館の館長はすべてのネットワーク、25の施設を、「今年もいい年になりますように」という挨拶に回ります。一日が終わると、本当に疲れてしまうという一日です。

次に、オデガード図書館について見ていきます。オデガードという名前は、1950~60年代に大学の学長をしていた方の名前から取っています。この学長は、「学部生には自分たち専用の図書館スペースがあるべきだ」と提唱した方です。1972年に建設され、現在、25ある図書館のネットワーク施設の中で、一番利用者が多い図書館です。毎日1万人ほどが訪れます。なぜでしょうか。

まず一つの理由として、大変開放的なスペースで、週に 5 日間、24 時間開いています。ワイヤレスの無線 LAN 設備が整っており、コンピュータの 教室が二つ、グループ学習室が 14、350 人が入れるコンピューターラボ、現在ではラーニングコモンズと呼ばれている施設があります。

さらに館内には、全部で約 400 台のコンピュータがさまざまな場所に散在しています。マルチメディアセンター、ライティングセンター、テレビ会議用スタジオ、テクノロジーセンター、テクノロジースペースがあります。

こういった図書館の進化の歩みは、革命的というよりは進化論的な歩みを歩んでいます。私たちは段階的に、学生の希望に応えようと努力してきました。もちろん、理想的なものに到達したわけではありません。この図書館は改装、現代化を行い、さらにスペースを増やしていく努力が必要です。

しかし一つ言えることは、私どもが図書館を設計するにあたって、学生を中心に据えてきたことは確かです。古きよき 70 年代には、すべてが開放的でした。これは、よい面もあれば悪い面もありました。よい面は、何があるかすぐに見えます。悪い面は、起こっていることすべてが聞こえる。つまり、騒がしいということです。

こちらに表示してあるのは、私どものホームページです。図書館の中でこういったサービスを提供しているのか、そのオプションを見ることができます。今日のプレゼンテーションでは、今日の学生の特徴と、こういったニーズがあるかを見ていくことにします。観点は、私たちがこういったものが必要だろうと考えているものではなく、実際に必要とされているニーズについて見ていくことにします。

その中で一つ言えることとしては、自分たちのための図書館をつくるのではないということです。これが今日の図書館の図です。これは、どこでもありえるような場所でしょうか。写真の中で、いわゆる図書館というものが目につくでしょうか。こういった写真を見ると、私たちにとっての図書館は本が存在している、その本こそが図書館のアイコンになっていたことに気づかされます。

もし物理的に本が存在しないなら、私たちはどうやって図書館を探せばいいのでしょうか。もしこれがどこにでもあるような光景なら、私たちが図書館を改良していくためにどういったことをしなければいけないのでしょうか。

その問いへの答え方として、私たちがラーニングコモンズ、インフォメーションコモンズのほうがよいということを提示していくために、本やそれ以外のものが併存して存在するかたちを目指すところから始めます。

本やコンピュータを考えたときに、技術が完全に人にとって代わることは考えられません。こちらの写真でもわかるように、対面的なサービスも提供しています。必要なときに、必要なサービスを対面で提供することを目指しています。

こちらの写真を見ていただくと、私たちがどのようにしてテクニカルサポート、対面のレファレンスサポートを組み合わせているかを見ていただけたと思います。ワンストップで技術的なヘルプを得ることもできれば、レファレンスという意味のヘルプを得ることもできます。

テクノロジーだけではありません。印刷されたもの、デジタルが融合するスペースもつくり出しています。学生が必ず展示品や本に突き当たるように、そういった演出をしています。図書館は、今日においては思考、からだ、精神といったものに栄養を与えていくために、社会的な場、学術的な場、知的な場を提供していかなければいけないのです。

学部生はパラレルワールドで、いろいろな人と一緒に作業をしたいと考えています。孤立や静けさは、望まない傾向にあります。もちろん個別の学生がどういったものを必要とするかはときどきによって変わります。たとえばある人は「今日は静けさが欲しい」と言うかもしれません。また、ある午後、別のときに同じ人に聞いてみると、「今日はうるさいほうがいい」と言うかもしれません。

ジョン・シーリー・ブラウンという社会学者がいますが、彼は「学習とはただ単に教えることではなく、人が集って初めて学ぶことができる」と語っています。学生たちは新しい空間を試してみたい、新しい勉強を練習してみたい、学術的な世界に足を踏み入れてみたいと考えています。

それでは、学生たちにどうやって理想の環境を与えるのでしょうか。もちろん空間をいろいろ工夫することはできますが、協力者なしにはできません。教授陣の協力です。学生たちは図書館から学士号を得るわけではありませんが、図書館なくして卒業することもできないのです。

パートナー、教授陣が考えていることを探ってみましょう。彼らが何を考えているのか、何を心配しているのか、私たちがどうやって教授陣の助けになるかを考えなければいけません。教授陣は、リサーチについて心配しています。常に最新の状態でいること、入手困難な文献を入手したいと考えています。出版物、昇進、テニアなどについても心配しています。

懸念事項をリストアップしたのは、こういった懸念事項を考えることがどのような図書館をつくれればいいのかの手がかりになると思ったからです。

教授陣の中には、指示方法について心配している人もいるでしょう。クラスのホームページ、シラバスのつくり方に頭を悩ませている方もいらっしゃるでしょう。学生たちから難しい質問があった場合に、どうやって効果的に答えればいいのか悩んでいる人もいるでしょう。どうやって課題や試験をつくるのか。自分が受け持っている授業のために、どのような文献を用意しておけばいいのか。もちろん、学生たちからの評価も気になります。

これは1986年に行われた調査で、何が教授陣のストレスになるかを見せた図です。55%が報酬と表彰、12%が時間的制限、次が学科の影響、プロフェッショナルとしてのアイデンティティ、学生とのインタラクションです。つまり、下に行けば行くほど、あまり心配していない。まずまずやっているのではないかと考えていることになります。

図書館が一番上の報酬と表彰、それから時間に関してサポートできます。例をお見せしましょう。これは歴史ライブラリアンがつくった、歴史の授業のウェブサイトです。北太平洋側の労働の歴史の授業で、ライブラリアンは学生たちが期待するニーズに沿って、このウェブサイトをつくりました。ライブラリアンはそれぞれの授業に対して2次的な文献、もしくは学術的な文献を用意して、教授陣は大変感謝していました。

次に、学生が考えていることを探っていきましょう。まず、足を止めて、彼らを観察しなければなりません。彼らの声に耳を傾ける必要があります。調査、実施テスト、観察、フォーカスグループなどからヒントを得ます。

ロチェスター大学は新しい図書館をつくりましたが、そのときキャンパスにいる人類学者と協力したそうです。この研究のすばらしかった点は、学生のプロフィールを一つに限定しなかったことで、さまざまな学生のプロフィールをピックアップしました。いろいろな学生がいて、いろいろなニーズがあることがわかりました。

「ビッグバン」と書かれています。皆さん、これを OCLC の刊行物でご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。ゲーマー対ブーマーということです。

ゲーマーは、1970 年代以降に生まれたゲーム世代です。英語ではミレニアル、トゥイックスター、ジェネレーション C などとも呼ばれています。前提は、テレビゲームであればかのゲームであれ、彼らはゲームに触れていて、こういった文化に慣れ親しんでいます。

彼らはモチベーションが高いのです。何のモチベーションかというと、勝負にかけるモチベーションです。へこたれません。ゲームでは、負けることが当たり前です。たくさん負けてからでないと勝てないので、へこたれません。

それから、自信があります。ゲーマーたちは、自分たちを専門家と考えています。問題解決を自分たちの手で行いたいと考える世代で、社交的です。友だちと一緒に、ゲームの解決に取り組んでいます。分析的で、ゲームを分析して学ぶというパターンが身につけており、より深く、より戦略的に問題解決することに慣れています。

それでは、ブーマーと比較してみましょう。私の世代です。ベビーブーマーはキャリア重視で、金、役職、報酬が重要です。家族との時間を犠牲にしてまでも野心的である、と言えます。残念ながら、離婚率は一番高いです。

ゲーマーはというと、そういったタイプのキャリアを求めているわけではありません、一歩下がって、自由と柔軟性を求めています。ブーマーは物質的で、両親よりよいものを買って育てられてきたので、ものを買うことに意味を置いています。猜疑心があり、自立して理想主義であり、世界はよくなるだろうという信念を持っています。

ということで、ゲーマー世代のユーザー側、学生たちと、図書館をつくっているブーマー世代の間には隔たりがあることがわかります。学生たちはコンピュータ、メディアに囲まれて育ち、常に接続され、常にマルチタスクをしています。マルチメディアを使うことが大得意で、グループでの作業も大丈夫です。経験からものを学び、ビジュアルに重きを置いています。

一番最後にとっても重要な点ですが、彼らはコンシューマーであると同時にプロデューサーでもあります。これを一つの言葉にして、「プロシューマー」という言葉が生まれたくらいです。

ところがその一方で図書館はどうかというと、文書ばかりでマルチメディアもありません。お互いに知識を共有して学び合うのではなく、専門家から一方的に知識を受けることになっています。また、一人で仕事ができるようなつくりにもなっています。直線的で、ロジック重視の環境です。

今日は皆さん、ここに一堂に会していらっしゃいますが、いま私たちは学生たちにゾーンインしなければいけません。ゾーンインはズームインと言えるかもしれません。これは英語のしゃれになっていて、ゾーンには空間の意味もあるので、空間に配慮した学生重視のエリア、空間をつくっていきましょうという意味です。

では、効果的な学習のための効果的なリソースについてお話ししたいと思います。皆さんにぜひお勧めしたい URL があるので、ここでご提示できない場合には後ほどお教えします。40 枚目のスライドに、[jisc.ac.uk](http://jisc.ac.uk) とつながっているものがあります。これをぜひ参考にしていただきたいと思います。

90 年代には、図書館の中に技術を入れていくことに重きが置かれていました。現在ではすでに図書館に技術が取り入れられており、今後図書館では学習スペースに焦点を当てていくことになります。バーチャルな空間においても、現実の空間においても、これまでにないくらい、学習という行動は教室以外のところでたくさん行われています。

21 世紀の図書館は、より開放的な空間になっています。四角というよりは丸みを帯びた空間で、かつ明るい空間でもあります。男女を問わず、来たいという人々を歓迎する空間になっています。

ノースカロライナ大学の学長、モーザー博士は、「物理的につながることによって哲学的なつながりができることもある」と述べています。そうすることによって、さまざまな学習機会が提示されるのです。

学習空間の設計は、その機関の学習ビジョン、戦略を体現するものでなければいけません。柔軟性に富む必要もありますし、未来に耐えうるものでなければなりません。大胆で、創造的であり、学習者に元気、インスピレーションを与えるものでなければなりません。

それに加えて、マイケル・ゴーマンさんは「学習空間としての図書館、すなわちラーニングコモンズは、全体に行き渡っていなければいけない」と言っています。ラボだけではなく、全体にその雰囲気が行き渡っていなければいけないのです。

今日の学生はビジュアル志向で、テキスト志向ではありません。繰り返しになりますが、この世代は消費者であるだけでなく、コンテンツの製作者として登場した初めての世代でもあります。どのようなかたちでコンテンツをつくっているのかというと、ブログやウェブサイトをつくったり、フェイスブックというかたちで自分から情報を発信しています。一日中、それをやっている人もいるわけです。

2006 年に行われた企業に対する「新人採用において重要視されるスキル」の調査では、このような結果が出ています。一番高かったのはチームワークスキルで、これが必要だと答えた企業が多くありました。批判的思考法、合理的考え方の持ち主であること、言葉、文書でコミュニケーションを取れるスキル、情報を集めて整理できる能力、革新的な考え方、または創造性、数字や統計を扱えるスキル、これはその場所にもよりますが、残念ながら外国語能力はかなり低い位置にランクされています。

では、私たちはどのようにして手助けしていくことができるのでしょうか。まず、教員、情報リテラシーの手助けをしているキャンパス内におけるその他の組織とのパートナーシップを組みます。私たちは英語の *hidden curriculum*、隠れたカリキュラムという言葉

使うことがあります。皆さんは、隠れたカリキュラムという言葉をご存じでしょうか。

こういったものは、授業、講義の概要の説明には書かれていません。授業では教えないけれども、学生がそれを知っていることを前提に講義を進めるといったものです。どの教員も学生により作文を書いてほしいと思っていますし、うまくスピーキングをしてほしいと考えています。

今日、非常に大切なスキル、たとえばビジュアルリテラシー、環境問題に関連するリテラシー、テクノロジカルリテラシー、情報リテラシー、統計的リテラシーに通じてほしいと考えているのです。批判的思考ができてライティングとリサーチを区別して考えられること、盗作を防ぐということです。

こういったものは図書館の伝統的な役割とは違いますが、図書館が大変うまく立ち回ることができる部分でもあります。学生は、図書館がこういった役割ができることに驚いています。学生は自分の作文能力に問題があると考えていることがありますが、その理由として情報収集の部分に問題があることが多くあります。

そういったことから、オデガード図書館では **College of Arts and Science** とパートナーシップを組み、ライティングセンターを立ち上げました。このセンターでは学生が自分の課題を理解する手助けをして、どういったリサーチをしなければいけないかを把握し、内容についてブレインストーミングをする手助けをしています。

すごく複雑なスライドになっていてすみません。内容をまとめると、左側には全体の分野を網羅したものが書かれています。たとえば人文科学、社会科学、生物化学、物理学などの項目が書かれています。右側は長期的な目標と呼ばれるべきもので、コミュニティ、学術的進歩、多分野横断的なやり方、多様性、生涯学習などです。

センターがどのようなスタッフで構成されているかという点、まず図書館員、次に学生自身、学部生を含め大学院生などもコンサルタントとして携わっています。センターは、いつも予約でいっぱいです。加えて、ワークショップも行っています。

学部生のもう一つの特徴は、最後の最後に駆け込みでやる傾向があります。予約せずに、とにかくその瞬間に入っていきたいというニーズもあるのです。そういった中で、**Google Goes to College**、「グーグルが大学へ行った」という講義を行ったり、この中に書かれているものは日本語になりにくいものが数多くあるかもしれません。

スローガンとして、**Your New BFF! (Best Friend Forever)**、「あなたの新しい大親友」という言い回しが書いてあります。また、サイテーションのツールであるレフワークスといったものもあります。さらに、パブリックスピーキングの技術を学生に教授する講義もあります。

研究大学において、学部生が研究に参加する機会はこれまでもまして増えています。その中で見えてきたことは、そのような状況にもかかわらず、自分の研究について論文を執筆したり発表する学部生のスキルがなかなか上がらないという問題があります。

こちらの写真は、デジタル・プレゼンテーション・スペースと呼んでいる場所です。学生は、この場所を使ってプレゼンテーションの練習ができます。これをビデオに録って、それをレビューしてもらうために提出することもできます。

このスライドはここに入れようとは思っていなかったものですが、ここに書かれていることは皆さんにあることを思い起こさせてくれるものです。すなわち、「成功はまったく予期していなかったところに転がっている可能性がある」ということです。そういった結果がついてくるとはわからなかったけれども、それをやったことで予期しなかった成功がキャンパスで起こりうることを思い起こさせてくれるスライドです。

実は、パークレー校から私がヒントを得たイニシアティブが一つあります。学生の研究を表彰するにあたって、報奨金を与えるというイニシアティブです。

私どもはコンテストを行い、学生が応募してきますが、自分のリサーチのプロセスをエッセイにまとめるコンテストです。このコンテストは、学生からも教員からも大変好評です。六つの賞がありますが、学生はそこから 1000 ドルを得ることができます。上位入賞でない場合は、750 ドルをもらえます。教員も自分の学生にぜひこのコンテストに勝ってほしいということで、かなり力が入ります。これは図書館にとっても大変よい広報材料ですし、学部にとってもいい宣伝材料になるわけです。

こちらの写真をご覧ください。コンテストで賞を取った数学者のチームです。学生のチームは自分たちが書いたペーパーで表彰を受けたわけですが、右側に彼らのアドバイザーだった教員の写真も映っています。大変誇らしい顔をしているのがわかると思います。

次に、広報です。こちらのスライドは、ワシントン大学の学長、マーク・エマートの写真です。彼は最近、「アメリカ国内で一番給料が高い人たち」ということで新聞に取り上げられました。この時代にそういったことが流れるのはあまりよい宣伝にはなりません、彼がいてくれて私たちも本当にうれしく思っています。

これも一つのアイデアとして提供したいのですが、このように学長が参加して図書館のプロモーションを行ったり、何らかのかたちで特定のプログラムのプロモーションを行うことができます。私どもは、このようなイニシアティブに大変誇りを持っています。

もう一つ、アイデアがあります。これまでリサーチコンテストやライティングセンターのアイデアを提示してきましたが、コモブックというイニシアティブもあります。これはどういうものかというと、入学してくる大学1年生が全員、同じ本を課題として読んだらどうなるか、ということに基づかれたイニシアティブです。

私も、副議長としてこのプロセスに最初から携わってきました。現在、3年目になります。毎年テーマは違いますが、トピックを紹介します。

1年目のトピックはグローバルな健康衛生、2年目は地球温暖化の話、3年目の今年は移民がテーマとなりました。図書館員は、キャンパス全体でコモブックのディスカッションのリーダーになります。大変いい広報活動の一環となりますし、プロモーションとしても使っていけるものです。

このスライドはすみません。自分のプロモーションをやり過ぎたかと思いますが、意味は通じると思います。

もう一つ、アイデアがあります。スポンサーが共同開催のかたちでレクチャーシリーズを開催し、それに学生を参加させます。図書館と学部の総務部などが協力して、それぞれの分野で研究活動をしていくことがどういうことなのかというイントロダクション的講義

を学生に行います。

学生は、これを本当に気に入っています。単位が取れるものもあればそうでないものもありますが、毎週、新しい教員が講義をします。たとえば人類学、地理学、政治学、教育学といったものが、例としてこちらに挙げられています。

図書館は、キャンパスにとって大変自然なパートナーです。なぜでしょう。私たちには場所があるからです。私たちは多機関連携の機関であり、すべての人にサービスを提供することにコミットしています。図書館はほかの機関に比べてもより広く、深く、キャンパスに統合されている機関で、協力関係を築いていくことを自分たちの役割と考えています。

ときどきかもしれませんが、私たちには時間があります。専門性もあります。社会にとって適切であるという、必要不可欠なニーズがあります。もちろん、競合するものはあります。私たちがしていかなければいけないことは、戦略的に必ず必要不可欠な存在であり続けることです。

戦略的に考えた際に、ほかの人が痛みを感じるのはどこかを理解し、何か手助けできないかを自分から聞いてみることです。図書館にとって大変重要なのは、助けを求められるまで待つてはいけないということです。図書館はソリューションを提供するものであって、問題を発生させるところではないことを忘れてはいけません。

独自性を打ち出せるもので勝負していく必要があります。変化する意思があることも提示します。施設として、教員中心ではなく学習者中心の施設にしていかなければなりません。そして、競合がいることを忘れてはいけません。

いくつかアイデアを提示していきたいと思います。一つ目は、チームスポットです。これは学生がグループで協力しながら作業ができるスペースで、そのスペースに入ればさまざまな人と協力関係を築けるスペースです。

こちらの写真は、学生が学生に教えている場面です。スタディルームで行われることもありますし、チームスポットで行われることもあります。私たちは、自分たちのスペースがどのような目的を持っているかを再構築していかなければいけません。

これは、私どもの旧メディアセンターの写真です。旧メディアセンターの情報はアナログでしたが、現在ではデジタル化されています。なぜこの場所がこんなに混んでいるのでしょうか。いったい学生たちは、何が欲しくてここに来たのでしょうか。電源です。電源というのは、携帯電話、ノートパソコンの充電、PDAを使いたいといった理由でここにやってくるのです。

もう一つ、アイデアがあります。これはデジタル・オーディオ・ワークステーションと呼ばれるところですが、学生が自分でつくった作品に音楽や音声を加えるときに使えるスタジオです。

ノートパソコンを持ち歩いている学生が気軽に来て、手助けを求められるスペースをつくっていきます。これもジョークのようなものですが、"Computer Vet is in!"と書いてあります。Vetは獣医師ですが、「コンピュータ用の獣医師が図書館にはいるんだよ」と提示しています。普通、お医者さんが来たときに"Doctor is in."と言いますが、それに引っかけで"Computer Vet is in!"と言っています。

では、これまでのプレゼンテーションのサマリーに入りたいと思います。もうすぐ終わりだということで、皆さん、ほっとされているのではないかと思います。

ここで言えることは、協力関係を築いていくことが鍵になるということです。協力関係の構築は、望ましいものではなくて必須のものです。自分たちすべてを合わせたより賢い個人はいません。図書館は図書館員とサポートスタッフだけで構成されていた時代もありましたが、現在は従来型の図書館員だけではなく、新しいスタッフが入ってくるようになりました。新しいスタッフは、たとえば作文コンサルタントの担当だったり、技術者だったり、グラフィックの専門家だったりします。これは学生のためのサポートチームだ、と言い換えることもできるでしょう。

最後になりますが、南アフリカには **Ubuntu** という言葉があります。意味は「私が私であるのは、私を取り囲むすべての人のおかげである」という意味です。すなわち、「私の成功は皆さんのおかげで得ることができたものだ」ということを示しています。

今日のプレゼンテーションの中で、皆さんに少しでも新しいアイデアが提示できればよかったですと思います。ご清聴と忍耐に感謝いたします。どうもありがとう。(拍手)

いくつかビデオをお見せしたいと思います。中にはおもしろいものもありますので、ぜひご覧ください。私たちは、たとえ学生に障害があったとしても、その学生が図書館にアクセスできるような環境をつくらなければなりません。

ワシントン大学で障害者の図書館へのアクセスに関連する動画をつくっていたとき私にインタビューの依頼がありましたので、私がその中でしゃべっています。

(ビデオ上映)

先ほど出てきた **Do it** というプログラムは、連邦政府から資金を得ています。次にお見せする動画はジョークコンテストのようなもので、図書館をどのように紹介するかを競ったものです。あまりまじめに見ないでください。

(ビデオ上映)

これは学生がプロジェクトの中でつくったものですが、図書館がどういうところかを紹介するビデオです。

(ビデオ上映)

最後のビデオです。これが大変興味深い点は、学生自身がつくったことのみならず、メディアセンターにどういったものがあるかを紹介するビデオであることです。それを自分でやっているのです。

**司会** マッキンストリーさん、とても興味深いビデオまで見せていただいて、どうもありがとうございました。お疲れでしょうから、30分休憩を取りたいと思います。3時40分に、またここに集まってください。

(休憩)

**司会** 時間になりましたので、再開します。最初に、マッキンストリーさんのプレゼンテーションを、私なりにごく簡単にまとめてみたいと思います。

教員は図書館へ支援を求めている。新しい時代の学生の気質は大きく変化している。ワ

シントン大学図書館は学習者中心の考え方でサービスを提供し、デザインを考え、学習支援に取り組んでいる。その役割は、伝統的なものではない。ワシントン大学図書館の学習支援は見えにくいカリキュラムであり、ライティング・アンド・リサーチセンターを始めとしていくつもの革新的な取り組みを行っている。こうした取り組みの成功の鍵はコラボレーションである、ということだったかと思います。

これから質疑応答と意見交換を始めますが、質問と意見が混在してもかまわないと思います。質問、意見のある方は手を挙げていただきますが、述べる前に大学名とお名前を教えてください。必ずマイクを通しておしゃべりいただきたいと思います。それでは、質問または意見のある方は手を挙げてください。

**公文** 法政大学の公文です。大変おもしろい興味あるお話、ありがとうございました。図書館が持っている潜在的な能力というか可能性を具体的にを見せていただき、私どもにとっても大変参考になりました。

二つほど質問させていただきたいのですが、一つは学生が図書館の活動に参加して、いくつもの大変おもしろい成果を上げておられるように思いました。私どもの大学でも、ライブラリーサポーターという名称で学生に参加を呼びかけました。もちろん多少はあったのですが、いまのところ当初予定した成果はもう一つ、こんなふうにはなかなかなりませんでした。学生に参加を呼びかける際に、工夫しておられることは何かあるのでしょうかということが一つです。

もう一つは、**hidden curriculum** を図書館が提供するという大変おもしろい試みに関してです。外部の方と協力体制をつくっていく点は大事な視点ですが、その際にライブラリアン、スタッフ、図書館の人たちはどんな役割を果たすのかお聞きしたいと思います。

私ども法政大学の図書館では、図書館のスタッフが学生を一つの部屋に呼んで、図書の使い方、あるいはデータベースへのアクセスの仕方などについてガイダンスを行っています。その際は外の方の協力というよりも、主として図書館職員が担当しています。それに、大学の先生方に協力していただいています。

ワシントン大学の場合、図書館のライブラリアン、あるいはスタッフの人たちは、その際どんな役割を果たしておられるかを、二つ目の質問としてお聞きしたいと思います。以上、二つです。

**マッキンストリー** 1点目のご質問に関して、私から質問があります。学生に関するご質問で、有給の学生アルバイトのことなのか、それとも学生ボランティアか、どちらでしょう。日本では、学生は図書館で仕事をしますか。

学生たちの労力なしに、図書館の切り盛りはできません。それはすべての人にとって、大きなチャレンジだと思います。私どもワシントン大学ではライブラリー・スチューデント・アドバイザー・コミッティという委員会をつくり、これがとても重要な委員会であることを学生たちに大々的にアピールしています。彼らに重要な任務を与えているのです。

諮問委員会なので、私たちのウェブサイトに関して学生の側から意見を言ってきます。また、学生が使う本を買う予算枠を与えています。私たちが図書館のポリシーを変えるときには、必ず学生たちに意見を問うことにしています。

おもしろいことに、私たちよりも学生自身のほうが学生たちに厳しいのです。たとえば罰金、延滞、本を借りられる期間といったことに関しては、学生のほうが学生に厳しいです。諮問委員会のメンバーの学生の多くは、私たちのライブラリー・リサーチ・アワードの受賞者です。

もう一つ、キャンパスにはオナーソサエティというものがあります。優秀な生徒、成績が 3.5 以上の学生という意味です。全体の点数は 4 点なので、そのうちの 3.5 を取った生徒たちです。

オナーソサエティの会員であり続けるためには、何か奉仕活動をしなければいけません。その奉仕活動の一つに、ライブラリー・スチューデント・アドバイザー・コミッティのメンバーであることもカウントされます。学生はみんな忙しいですからボランティアの時間を探すのも難しいかもしれないのですが、こういった手法を取ってきました。

その結果、私たちにとっても学生たちにとっても成功した、満足できる結果になりました。こういった図書館運営にかかわった学生たちの多くは、最終的にはライブラリアンになっています。

もちろん図書館をサポートするのが彼らの役目ですが、とても忙しいので、図書館から何かを得なければ彼らも手助けする気にはならないということです。

二つ目のご質問に移りたいと思います。hidden curriculum についてです。ライブラリーのスキルを教えるだけでなく、図書館外でスタッフが何をしているかということだったと思います。

1 点目は、カリキュラムの委員会に図書館からもメンバーを派遣することです。人文科学の大学にはこういったカリキュラムのコミッティがあり、どの講義を取れば単位になるかを議論する場があります。そこに、図書館からも代表を送ります。

大学は 10 年ごとに評価されます。ライブラリアンも、評価の場に代表を送ることになります。選書委員会というコミッティもあります。新しい教員を探す場合に、教員が図書館で働くわけではなくても、代表メンバーを出しておくことも必要だと思います。

教員と一緒にあって、外からの助成金を調達するためのキャンペーンにも一緒に参加するべきです。実際に助成金が獲得できたら、そのうちのいくらかは、文献を買うために必ず図書館にも割り当てられるべきです。

教員は、学生の盗作に関しても敏感になっています。ライブラリアンは教員と協力して、学生が盗作しないように手助けすることに長けています。

図書館員も、カリキュラムデザインについていろいろと学びます。デザイン、設計の仕方は、さまざまなものを小さいパーツに分けて、それを学生に与えていきます。そうすることによって、学生は一つのプロジェクトだけに携わるのではなく、1 年を通してさまざまなものをいろいろな段階でやっていくかたちになるようにします。

もう一つあります。これは教員に対して、ウェブ 2.0 について教えていくことです。たとえば、講義の中でどのようにしてインタラクティブなツールを利用していくのか。こういったことを加味すると、ライブラリアンは必ず研修を受け、さまざまな新しいツールを与えられることによって、教員にいつも新しいものを提供できる状態にしておくことが必

要です。これでお答えになるでしょうか。

**司会** ほかに質問、意見のある方は手を挙げてください。遠慮しないでください、どうぞ。

**松岡** ワシントン大学がたくさんの改革を進められてきたことはわかりますが、図書館の改革には必ずリサーチが必要だと思います。どのようなリサーチから始めて、次々とどういうことを発見して改革を進めてきたのでしょうか。教えていただければ幸いです。

**マッキンストリー** 私どもの図書館の設計のかたちは最初から何か枠組みがあったということではなく、段階的に、ステップを踏みながらつくってきたものです。図書館を見回して、どういったところに問題があるのか、いわゆるあざのようなものができていないか、でこぼこができていないかといった不具合を見つけていきました。

学部図書館がほかの図書館に比べて優位な点は、一つの専門性に限られない点かと思います。一つの専門性に限られないことでさまざまな自由度が広がり、そのためにほかの図書館と比べて革新的なイニシアティブを取れることが挙げられます。革新的なイニシアティブを取っても、どこか特定の学部から文句が上がってこないのです。

3年に1度、私どもは図書館全体の調査を行います。教員が図書館を訪れる頻度は、すべてを合わせると減ってきています。その理由は、情報のほとんどは図書館に来なくても得られる情報だからです。たとえば特に科学、技術に携わっている教員はそういった電子的データを自分で取れるので、物理的に図書館に行く必要がないことが挙げられます。

社会科学、人類科学の教員に関しても同じようなことが言えますが、図書館の側としても、デリバリーをいままでよりうまくしていることが理由として挙げられると思います。

そういった教員に対して、学部生は教員が持っているような研究室があるわけでもなく、そのような機器がそろった家に住んでいるとは限りません。まさに、図書館が学部生にとっての研究室となっているのです。

私たちはそういった強みをどのように生かしていくか、いつも腐心しています。どのようなところで、どのような数字を伸ばしていくのか、といったところを見ていくのです。いまのもので質問のお答えになっているでしょうか。もう少し肉づけしたほうがよろしいでしょうか。

もう少し具体的にということですが、具体的とは私どもが行っている研究調査についておっしゃっているのか。それとも、私たちがほかの大学に関して調べたことに関してお知りになりたいのか、どのようなところを掘り下げて聞きたいと思われているのでしょうか。

**松岡** 私が聞きたいのはいまの図書館の到達点というか、いまの改革を成し遂げるために一番重要なリサーチで発見したものは何だったのだから。それはどのようなリサーチで発見していったのでしょうか、ということです。

**マッキンストリー** どのようなリサーチを行ったかというよりは、評価、アセスメント、査定などを行ったところにポイントがあるかと思います。

毎年、「あなたは今日、どういったことをしましたか」と聞くようにしています。「図書館の中でいったい何が気に入りましたか、どういったところが気に入らなりましたか」と聞きます。また、「皆さんが学術を探求していく中で、図書館が手助けできる場所はど

こでしょうか」と聞きます。

その質問に加えて、「皆さんは、何々を教える責任を持っているのはだれだと思いますか」、その責任がどこにあるかを聞いてみます。そこで、意見の相違が明確に表れてきたのです。すなわち、学生はものを教えてくれる人は教員だと考えているけれども、教員は「教員ではない」と答えてきたからです。

観察することも大変重要です。自分たちの大学にいる学生が、図書館という場所をどのように使っているかを観察します。もちろん、私たちは学生の声に耳を傾けています。声に耳を傾けたら、今度は実際に足を運んで学生がどのようにやっているかを確かめなければいけません。四半期ごとに三、四回やっていますが、私たちは実際にその場に行き、学生たちがいったい何をどこでやっているかをチェックしています。

最後に、観察した際にわかったことは、大変静かな環境で個人で学習している学生と、コンピュータを使って作業している学生の数はだいたい同じだったということです。これはどういうことかということ、私どもにとって大変重要な情報です。私たちは個人で静かに勉強する場所を提供しなければいけないし、それと同じくらいに、コンピュータを使ってグループなどで作業できる場所を学生に提供しなければいけないということがここからわかってきたのです。

もう一つ、皆さんに提供したいアイデアがあります。会議に出席する機会は皆さんもおありだと思いますが、こういった会議に参加される際にはチームを組んで行かせるのがいいと思います。チームの中には図書館員はもちろん含まれますし、それに加えて教員、技術担当者を一つのチームにして行かせるといいかと思います。その三者が一緒に出席することにより、一緒に新しいアイデアに取り組んでいくことができるからです。

もちろん、間違いも犯してきました。こういった間違いを犯した場合、しばらくの間は間違いと付き合っ生きていかなければいけません。しかし、図書館が学生の欲しているものを提供している限り、学生はそういった間違いを特に気にせずに着いてきてくれます。

学生に関して一つ言えることは、だいたい学生は4年たつと巣だってしまいます。もちろん図書館について考えることもあるけれども、図書館がまったく頭になくときもあります。彼らが図書館について考えるときは、図書館が自分たちを助けてくれることができます。もし図書館が助けてくれないなら、別のところへ行ってしまう。

学生が離れてしまわないように、図書館は学生をつなぎ止めるさまざまな施策を取ることが必要です。ワシントン大学には25の施設、図書館ネットワークがありますが、私たちはすべてのゲートにおいてきちんと一定数の利用があるかどうか、人数をカウントしています。数が減ってしまうと、図書館として存続していく可能性が低くなってしまうこともあるのです。すなわち、学生は自分が足を運ぶことによって図書館に投票している存在なのです。

**司会** ほかに質問のある方、どうぞ。

**牛崎** 立教大学の牛崎と申します。実はたくさんの質問があるのですが、一番多く聞きたいのは、図書館スタッフの人員費、メンテナンスの年間コスト、年間の図書費です。そういうものは、バランスとして何か見ているのでしょうか。

それと関連して、学長、州政府は、何によって UW の図書館を評価してお金を出そうとするのでしょうか。その構造を知りたいということが一つです。まず、これをお願いしたいと思います。

**マッキンストリー** ワシントン大学の1年の予算は3500万ドルで、そのうち60%が人件費+運営費、40%がリソースです。人件費が一番大きいウェートを占めていることがわかります。人がいなければ、図書館の運営は不可能です。

もう一つ、図書館には任期があります。図書館員は任期を全うすれば最終的には終身雇用になるので、テニアを満たそうと考えています。こういった理由で、彼らはある意味、仕事が保障されているわけですから、人件費をカットすることが難しくなっています。ただ、ポストが空いたあとにポストを埋めないことでバランスを取ったりはしています。

リソース費も毎年アップするように交渉していて、レートは7%です。もし上昇しないと、インフレがあるので赤字になってしまいます。今年、アメリカ、ワシントン州では、財務状況が大変苦しくなっています。本当に残念です。これから2年の間に、60億ドルの財政赤字になると予想されています。今後、私たちがいまだかつて経験したことのない状況に足を踏み入れることになるだろうと考えられます。

メンテナンスコストに関しては、幸いなことに中央の予算の中に一括で組み込まれています。ただ、残念ながらコストは1平方フィート当たりで決められていて、利用者数によって決められているわけではありません。ユーザーが毎日1万人も来るので、私が望むほど図書館の中はきれいではありません。

ご質問の二つ目ですが、私どもの学長は常に大学の名誉というか、権威にすごく気を使っています。権威が高ければ高いほど資金を多く集められますし、より多くの機会をつかめるからです。学長はシードマネーを払って、より大きな助成金を得ることさえあります。

現在、どのような資金集めの活動をしているかという点、ワシントン大学にはナショナルサイエンス財団というものがあって、そこから2000万ドルを得ようと考えています。調査を行っていますが、調査の中で図書館が主要な調査員になります。もちろんほかの学科も参加します。たとえばコンピュータ科学、情報科学、健康科学などが、一緒にチームを組んで作業しています。

**牛崎** ありがとうございます。立教大学は今年はいたい15億円をかけて、3分の1、つまり5億円がリソースへの配分で、30%対70%になっています。立教の例です。もう一つだけ質問させてください。

ファカルティのメンバーがワシントン大学でどうなっているかわかりませんが、たとえば学生にシラバスを提示するときに、「自分はセメスターでこういう授業をします」とウェブか何かでドキュメントを出されると思います。そのときに、個々の教員に対して図書館の利用について何か言及させるようなある種の取り決めがあるのかどうか。あるいは、図書館ガイダンスには必ず参加しなさいとか。

これが第2の質問ですが、ついでに細かい質問です。日本風に言うと教授会ですが、そこにライブラリースタッフが行かれているという言及があったと思います。ファカルティカウンシルかもしれません。そのスタッフは、そこで何をするのでしょうか。以上です。

マッキンストリー 私どもの大学では 30 講義くらいがビデオに録画されて、ポッドキャストで送信されるものがあります。皆さんは、おそらく教員はそんなことは好まないのではないかと思われるかと思います。教員は、理想的には学生を前にして授業をしたいと思うと思うからです。

ただ、これがものすごく人気です。なぜなら、たとえば英語が得意でない学生たちもいて、そういう人は何度も何度も聞くことができます。試験の勉強のために復習することも可能です。学生は何らかの事情で授業を受けられないこともあると思うので、バックアップとして録画を見ることができます。図書館は、こういった取り組みの中でパートナーとして教員と協力しています。

これまではもちろんビデオに録って、テープを教員が図書館に持ってきて、ということもありました。その場合は、学生が図書館に足を運んでテープを取りにこなければなりませんでした。

二つ目のご質問ですが、図書館の最もよい使い方は、ジェネラルなものではなく、より具体的に、専門的に使うことだと思います。学生たちが一番モチベーションが上がるのは、ある問題があって、その問題の解決策を見つけられるときです。これを、質問に根ざした教授法と呼んでいます。

たとえば歴史の教授が、学生たちに「1960 年代に育ったとしたらどうしますか」と質問します。どのような授業を受けていたのだろうか、どんな勉強をしていたのか、お店ではどんなものを買って、どんな映画を見たのか、歴史的調査を行います。とてもオープンな課題ですが、とても深く掘り下げなければいけないので、図書館を使わずにはられないのです。

私たちは、そういったやり方のほうが、学生に「とにかく図書館へ行け」と言うよりいいと感じています。講義に根ざした特定の問題を解決しなければいけないというやり方のほうが、ただ単に全般的に図書館に行って調べものをするよりはいいと考えています。

三つ目の教授会に関連する質問ですが、私どもの大学にも教授会の制度はあります。教授会はさまざまな分野で設置されていて、たとえば教員に関連する事項に関する教授会、学生に関連する事項の教授会、指導の質の問題を話し合う教授会、教員の定年などについて話し合う教授会、学術部門に関連する教授会、さまざまなものがあります。教授会のすべてに図書館員が参加しています。私自身は、学生関連のことを取り扱う教授会に参加しています。

私にとっても、教授会に参加する時間は大変貴重なものです。というのは、図書館にいるだけでは学生を教授の観点から見ることができないからです。ときとして、図書館にいるだけの生活はなんて幸せなのだろうと感じるときもあります。

**司会** ほかに質問、意見のある方は手を挙げてください。どうぞ。

**鈴木** 学習院大学の鈴木と申します。非常に簡単な質問です。二つあります。講演の一番最初のほうで、確か館長からよいお知らせと悪いお知らせがあると。悪いお知らせとして、非常にうるさいとおっしゃっていました。その「うるさい」はどういった程度のものなのかを、伺いたいと思います。

二つ目は、配布資料 24 ページの一番上にチームワークスキルズと書いてあります。私どもも、実はチームワークを非常に重視しています。チームワークはオデガード図書館においてどういった評価方法で測定するのか、具体的に教えていただきたいと思います。以上です。

マッキンストリー 質問ありがとうございました。騒がしさに関しては、階に分けて 3 段階で考えています。まず、1 階はうるさいもの、音があるところと位置づけています。2 階は 1 階に比べると少し静かな騒がしさ、3 階は静かな場所ととらえています。段階的になっています。

騒がしさ、音にはどういったものがあるかというご質問ですが、まずおしゃべりの音があります。いままでは携帯電話で話す人の声が結構問題になっていたのですが、最近はそのままで問題にならなくなりました。おそらく、携帯電話のマナーに関する教育のプロセスが段階的に行われたのだと思います。

それにどのように対処していくかですが、たとえば学生がやってきて「うるさすぎるから集中して勉強できない」と言ったとします。まず最初に勧めることは、「うるさいなら 3 階へ行ってみてください」と提案します。それに加えて騒いでいるグループのところへ行って、「もう少し静かにしてくれない？」と頼むことがあります。そういうふうに頼むこともあるので、必ず巡回する人がフロアにいます。

もう一つ、最近になって大きな変化がありました。それは、学生たちが耳栓をしている状態が多いことです。実際に耳栓をしている人だけではなく、ヘッドホンをして iPod を聞いたり、そのような状況になっている学生が多くなっています。たとえば周りが少し騒がしくても、自分が iPod で何かを聞いていれば周りの音がそこまで気にならない状況になっています。

それがまさに、現代の世代とこれまでの世代との違いです。このように技術を駆使することによって、自分だけの環境をつくり出すことができる場を与えられている世代なのです。こういった騒がしさは、いまは学生より私たち職員の立場のほうが気になる環境にあります。ヘッドホンがうるさい人がいたら、ノイズをキャンセルする機器を使うこともできます。

二つ目のご質問は、チームワークのスキルと、それをどのように評価するかということだったと思います。先ほどお示したグラフは、リサーチの結果を示したものでした。潜在的に雇用主になりうる人たちが、潜在的な新人社員にどのようなことを望むか、どのようなことを一番高く評価するかを聞いたものでした。

雇用主がどういったスキルを重視しているかが、このアンケート結果から見て取れると思います。どういうことを示しているかというと、雇用主側は新しい従業員が特定の知識をたくさん持っているよりは、先ほど述べられていたスキルのほうを重視するということが見て取れます。

なぜそうなるかというと、たとえば特定の知識は会社に入ってから教えることができるけれども、ほかの人と共同しながら働く、またはスピーキングスキル、作文のスキルがなければ、働くにあたってより重大な障害を引き起こすだろうと雇用主側が考えていること

がわかります。

大学における講義の構造を見ると、グループワーク的な作業が多くなってきています。学生は、グループワークが嫌いだという人が多いです。「ほかの人と一緒にやるより、個人でやるほうが簡単にできるから一人でやりたい」という学生が多いのです。

こういったグループワークは、社会に出て会社と一緒に作業しなければいけない状態に比べれば人工的な状態と言えます。ただ、大学の授業の中でグループワークをやってみることで、人と一緒に共同作業をすることのスタート地点にはなりえます。

**井上** 東洋大学の井上です。質問はたくさんありますが、三つばかりお願いします。一つは、図書の収集のことです。通常、われわれのところは学部の教員に運営委員みたいな担当者がおまして、その先生方をお願いする。要するに、学部別です。そのほかにはライブラリアンがやる。この二つです。

先ほど先生の考え方として、学生からも取っているということです。教員にやってもなかなか進まない場合がありますが、その場合はライブラリアンがどんどん収集していらっしやるのかどうか。それを一つ、お伺いしたい。

**マッキンストリー** 大学で取られているモデルですが、大変よいかたちだと思います。私どもの大学でも、そういったかたちでやっていければいいと思います。

**井上** ただ、教員がなかなか協力しないのが現実です。そこでどうするかが問題です。

**マッキンストリー** 収集にかかわっているという話をしましたが、実はかかわっているのは大変小さな部分にすぎません。学生が担当して収集している部分は、たとえば旅行に関連するもの、今後のキャリアに関連するもの、または履歴書はどのような書き方をしたらいいのかといった本、レジャーで、自分の自由時間に読むような本が含まれています。

過去5～10年くらいの間にはたくさんのイノベーションが行われてきましたが、その中で最も大切なものはコレクションを共有することです。ワシントン州とオレゴン州の図書館が一緒になって本を共有するプロジェクトで、その結果、文献のデリバリーが速くなりました。

こうすることで、教授陣の「この本がいまここになければ嫌だ」といった不満に対処しやすくなりました。そういった大学間の貸し借りみたいなコンソーシアムは、日本にはありますか。ワシントン大学の図書館はもちろん大きいですが、貸し出しているよりも借りているほうが多いのです。

**井上** ありがとうございます。2番目です。ライブラリアンの専門性ですが、たとえば教員が「こういう本が欲しい」、あるいはこちらから「こういう本がありますよ」とコミュニケーションする場合において、どのようにライブラリアンに教育しているのか。

私が思うには、ライブラリアンが直接、教員にアプローチをかけたほうが良いと言っているのですが、そういうかたちを取るには専門性が必要だと思います。その教育方法は何かありますか。

**マッキンストリー** いまご質問された点は、大学図書館と公立の図書館、もしくは短大図書館との違いだと思います。私どもの図書館には72の別々の分野が設定されていて、各分野に対して一人の専門ライブラリアンが任命されています。

たとえば私は、スペイン文学のスペシャリストでした。キャリアもだいぶ昔の話ですが、いくつかその分野で学士号と修士号を持っていました。いまはそれはやっていません。

教授陣がライブラリアンの言うことに敬意を払うことは、とても重要だと思います。なぜなら、準備をしているからです。教員がライブラリアンの言うことに尊敬の念を持って耳を傾けることは、必ずしも難しくはありません。そういった信頼関係を基に、ライブラリアンがさまざまな本を買っていけると思います。

もう一つ問題があります。私たちの職業に興味を持っている人はたくさんいますが、彼らの多くはとてもシャイです。シャイなので、舞台裏でいい、教授陣に会いに行くのはちょっと、という方が多いと思います。しかも、教えることがうまいかと言えば、そうでもありません。

戦略としては、一つのチームをつくり、その中にいろいろな人間を入れていくのいいのではないのでしょうか。たとえば教授法が得意な方、教えるのが得意な方、ウェブデザインが得意な人、一人にすべてのスキルはないので、いろいろなスキルを持った人を寄せ集めたチームをつくるのが重要だと考えています。

**井上** 最後の一つだけ、図書館には蔵書がどんどん増えると思いますが、ワシントン大学の場合はどうですか。保存庫の問題です。うちの大学でも保存庫の問題をたくさん抱えているので、どのようなやり方をされているのか教えていただきたい。

**マッキンストリー** ご質問、どうもありがとうございます。とてもいいストーリーです。学長を説得して、遠隔の場所に本を貯蔵するというやり方に成功しました。

近くに海軍基地があって、そこには莫大なスペースがあります。そこを改装して、私たちのコレクションのいくつかを保存することにしました。本当に幸いなことに、いまの経済危機の前に完了することができました。クリエ（デリバリーサービス）がいて1日に何回か書庫へ行き、本を図書館に持ち帰っています。

**司会** ほかに、どうぞ。

**菊池** どうもありがとうございました。明治大学の菊池です。今日のお話を伺って一番印象に残ったのが、大学の学生たちを非常に肯定的にとらえていることでした。たとえばスライドの19ページあたりに、ゲーマーズとブーマーズの比較がありました。

若い世代はゲーマーズで、モチベーションが高く、へこたれなくて自信家で、その特性を知ったうえで図書館サービスを考えていくというお話だったと思います。

かたやひるがえって日本の大学のことを考えると、たとえば私は明治大学で大学の教員と話す機会があります。そうするとよく出てくるのは、「いまどきの学生は」という言葉です。基本的な読み書きができない、コミュニケーション能力がないという話になります。ここが、今日のお話と全然正反対なところですよ。

図書館のサービスを考えるときに、サービスの対象である利用者がどんな特性を持っているか。肯定的にとらえるか、否定的にとらえるかで変わってくると思います。そのあたりのところ、どうして前向きにサービスを組み立てられるのか。そうか、利用者の見方が違うんだなということがよくわかりました。

でも、やはりよく考えると、否定的な見方はアメリカの大学にはないのだろうか。われ

われも図書館の中で学習支援などを考えるときに、思考の前提として「いまどきの学生は」みたいなことに影響を受けている部分があると思います。

そういう意味でいろいろなサービスを考えていくうえで、700人いる図書館スタッフの皆さんの学生に対するとらえ方は共通認識で、今日のご報告のようなかたちが大前提となってサービスを考えておられるのか。それとも、ネガティブな部分を前提にしたサービスを考えておられるのか。少し長くなりました。半分感想ですが、そんなことを思いました。

**マッキンストリー** 本当に素晴らしい質問、どうもありがとうございました。まさに私たちが苦しんでいる分野ではあります。ただ、一つ、コンセプトをご紹介したいと思います。それはユーザー重視のデザインということで、大学図書館をつくるうえではとても重要なコンセプトになっています。

こういった見方をすると、すべてが違った角度から見えてきます。たとえば食べもの、飲みものを見ても、確かにそうです。「図書館で食べたり飲んだりするなんて信じられない」という図書館員が多いですね。汚くなるし、においもする。

ただ、私たちの図書館は24時間オープンしています。午前3時まで勉強しているような学生が、何も食べないでずっといるとは考えにくいのです。お腹が空いたからといって学外に出てしまっただけでは、危険なことが起こりかねないという懸念もありました。そういった意味で、私どもとしてもコントロールが及ぶ範囲で少し妥協しなければいけない状況にあったのです。

しかし、こういったプロセスはゆっくり、ゆっくり進んできました。どうなったかというと、もちろん図書館で飲み食いしてほしくないという気持ちはあるけれども、それを許す形態を取っています。そういったことを許すことで得られるメリットを、より重視しているからです。

もちろん、非常に希少な書物や重要な書物の周りでは、飲食してはいけないことになっています。それが最初の点で、ユーザー中心のデザインにすることです。

二つ目、学生に対して否定的な見方はないのかということですが、もちろん大学では一つの大きな課題になっています。大学だけではなくて、小中学校、高校でも同じようなことが叫ばれています。たとえば、小学校や中高で生徒は何も学んでいない。大学も、結局スキルを得られないまま卒業しているのではないのかといった議論はもちろんあります。

しかし、あることが起きています。どういうことかということ、SATやPSAT、入学試験の学生の成績がどんどん上がっているのです。それに加えて、学部生はこれまでもまして教員と共同で研究を行い、授業以外で課外研究活動を行うようになってきています。このように学生たちのレベルが上がってきている、すなわち何かを自分で作り出すことに長けている学生がたくさん発生していることが、否定的な見方を否定する要素になっています。

先ほどビデオでもご覧いただきましたが、図書館にある資料のガイドを学生自身が、あれだけすごいものを作り出すことができている。そういった人たちはたった一人ではなく、それに加えて本物の研究を学部生の時代からやるが増えていることは、「学生は何も知らない、無知ではないか」といった議論を打ち消す要素になっています。

**菊池** 私も大学へ帰ったら、ぜひ私の大学の学生のいいところ、長けているところ、長所をもう一度考え直して、図書館のサービスを考えてみたいと思いました。ありがとうございました。

**司会** ほかにご質問、ご意見はありますか。

**伊藤（義）** 青山学院大学、図書館の伊藤です。一つ感想のようなものです。いまの明治大学の方とだぶりますが、学生の分析をするにあたって、いまの学生の気質とライブラリーを運営している人間の分析を入れる。通常、自分たちのことはさておいてという感じですが、両方を対比しているということで、非常に興味深く拝聴しました。

質問が二つあります。25のライブラリーがあるということですが、それぞれ何か特色を持った図書館なのか。日本で言うと、学部の図書館のようなものなのかということです。

**マッキンストリー** コメントおよび質問、ありがとうございました。先ほど言った25の図書館の中には、もちろん支部的な、ユニット的なものも含まれていますが、専門分野に特化した図書館があります。芸術図書館、演劇に関連する図書館、工学に関する図書館などです。

それに加えて四つの大きな図書館がありますが、四つの中には先ほど申し上げたオデガード、スザロといったものが含まれています。こういったものは、一般的な図書館と言えるでしょう。また、ボセルやタコマに二つの支部がありますが、一般的な図書館なのでそういうところの特徴は似ています。

いま現在、専門分野に特化した図書館および一般的な図書館の評価は新しい時代に入ってきていると言えるかと思います。専門分野の図書館は概して一般的な図書館と比べると規模が小さかったり、場所が狭かったり、テクノロジー的に見たときに、大きめの図書館と比べて劣るといった状況があります。でも学生側からすると、どの図書館に行くとしても同じくらいのレベルのものを享受したいという要請があります。

おそらく将来的には、統合が起こっていくのではないかという気がします。たとえばどのような統合が起こるかということ、芸術系をまとめた図書館、生命科学をまとめたもの、社会科学もあるかもしれません。そういったかたちで統合が起きていくのではないかと思います。

**伊藤（義）** あと一つは、ライブラリアンの方がさまざまな教授会にも参画しているということです。日本でもありますが、ライブラリアンの方は情報リテラシーの授業、あるいはどのような授業をされているのでしょうか。

**マッキンストリー** 図書館員がかかわっている講義には、さまざまなものがあります。たとえば私は去年、院生のゼミで経営に関して講義を行いました。院生は今後、図書館員を目指す学生だったので、私としても大変難しいタスクでした。すごく正確性を求めてくる学生がたくさんいたので、教えるのに一苦労しました。

たとえば政府刊行物を担当している図書館員なら、学生に統計を教えることがあります。図書館員によっては歴史を教える方もいますし、インフォマティクスと呼ばれる分野の講義をする方もいます。学生に、この分野に関しては実際にどこで情報を取ってくるができるか、といったことを教える授業もあります。私はそういったものの講義をしたこ

とがありますが、学生には単位となり、担当教授は私で、ほかの教員はその講義は教えません。

図書館員が講義に携わる授業でおもしろいものは、1年生に対して行う授業があります。これは1単位だけですが、この1単位は図書館員が何でも教えていいというものです。私の同僚の図書館員の中には子どもの絵本に出てくるイメージを講義した人もいますし、特徴的な音楽について教えた人もいます。また、これまでに書かれてきた古典の名作について講義を行った人もいます。

**伊藤（義）** どうもありがとうございました。

**司会** ほかにご質問、ご意見はありますか。

**公文** ずっと聴いていると、図書館はほとんどがライブラリアン中心の、いわゆる利用者の支援をしている場合が多いようです。そのほかに、収集、登録、貸出しは別の人がやるのでしょうか。それとも、ライブラリアンが兼ねているのでしょうか。そのへんを聞きたいと思います。

**マッキンストリー** 質問ありがとうございます。先ほど申し上げたように、私どもの図書館には165人のライブラリアンがいます。専門のライブラリアンです。その中には私もテクニカル・ライブラリアンと呼んでいるライブラリアンがいて、実際に本を買ったり、収集したり、目録をつくったり、貸し出したりといったことをしています。こういったものも私たちの図書館システムの作業の一つですが、今日はパブリックサービスの観点から発表しました。

テクニカルサービス・ライブラリアンは本当に舞台裏の作業をする方たちですが、その中にもレファレンスデスクに立って実際に学生さんたちと触れ合う方々もいます。ユーザーとつながっていることは、彼らにとっても重要だからです。

そういった案内デスクにいと、学生たちの実際の反応が直接見られます。困っているのか、目録の作り方がうまくいっているのか、説明が学生たちにきちんと伝わっているのかどうか、リソースへのナビゲーションがうまく伝わる内容なのかどうか。そういったことが、デスクに立つことによってじかに伝わってくると思います。

**公文** そのことですが、実はその分野のアウトソーシングというかたちが最近、どんどん進んでいます。アウトソーシングすると、専門のライブラリアンと分かれてしまう気がします。そういうことがあるのかどうか。あるいは、もしそうならコミュニケーションはどうしているのか。そのへんのところをお伺いしたい。

**マッキンストリー** 大きなチャレンジだと思います。それにきちんと答えられるものは持ち合わせていません。ただ、OCLCは使っています。カタログをコピーして、レファレンスとしてOCLCへ提供しています。外国の書籍の場合には目録の作業、カタログングをアウトソースする場合がありますが、たいていは内部の人間でやっています。

**司会** ほかにご質問、ご意見はどうですか。まだご発言いただいていない方がおいでしたら、感想のようなことでもよろしいですが。

**小泉** 立教大学の小泉です。ずいぶん昔、20年くらい前ですが、UWを訪問したことがあります。とても美しいキャンパスで、地下に広大な駐車場があったり、桜の花も咲いて、

とにかく広大なキャンパスでした。そのころにはなかったのですが、いまアメリカは Eブック、電子図書がとても多いと聞いています。そういうものはだんだん増えているのでしょうか。使う上での問題点や、どの程度使っているか。

たとえば本当の本と Eブックとがあった場合、学生はどちらを読むのだろうか。そういったことの実験があれば、教えていただきたいと思います。

**マッキンストリー** とてもいい質問をありがとうございます。最後の質問ですが、場合によって使い分けています。分野によります。特に医学の分野では、Eブックか、実際の本かを比べてみた場合、どちらがすぐれているかということはありません。いろいろな仕組みが 3D で見られます。

注釈をつけたり、加筆できたり、オーディオでも聞けたりということで、とても便利です。文学も、オーディオになっていけば読んだ声で聞けます。見ることもできます。ただ、問題もあります。

学生が Eブックと実際の本と、どちらを買うかという選択肢を与えられた場合には、実際のものを買う場合のほうが多いです。なぜなら、Eブックは一定の期間が過ぎるとなくなってしまうからです。古本として売ることもできません。

私たちの中にはブックストアがありまして、中古の本を買ったらディスカウントみたいなものが得られます。そういったサービスは、Eブックでは受けられません。学生が一番何を求めているかということ、中古の実際の本です。安いし、売れることもできるからです。

アメリカでは教科書の値段がどんどん上がっていて、学生たちは大変怒っています。たった 3 カ月間で、たとえば 600 ドル、700 ドルのお金を教科書だけに注ぎ込まなければいけないので、いま教授陣の教育運動が推進されています。教科書ではなく、ほかの方法で資料を学生たちに届けられるのではないかという考え方です。

図書館には蔵書、リザーブというものがあるので、リザーブの中に教員が重要な文献を入れるのです。それを電子的に、章などをつけて検索可能にしています。たとえば昔は本を 5 冊買って、リザーブに入れて学生たちに見てもらっていましたが、いまはたった 1 部しかありません。それをスキャンして、教授陣が自ら提供します。

**小泉** どうもありがとうございました。テキストだけではなくて、図書館の資料としても Eブックは増えているのでしょうか。

**マッキンストリー** ネットライブラリーというものがあって、レファレンスやハウツー本など、とても使いやすいです。

**小泉** それは期間がなく買い取りで、図書館ではずっと使えるんですね。

**マッキンストリー** 24 時間か、48 時間か、オンラインでチェックします。これは印刷の次のモデルですが、あまり腑に落ちない部分もあるかと思います。なぜなら、お金の面からプッシュされているモデルだからです。

**小泉** ありがとうございます。20 年前と全然違いますね。

**司会** それでは、最後のご質問、ご意見にしたいのですが。

**伊藤(祐)** 東洋大学の伊藤です。東洋大学も図書館をつくり直そうと思っているので、今日はいろいろと参考になるお話を聴けましてありがとうございます。最後に一つお尋

ねしたいのですが、もし次の計画があるならば、お話しできる点があるならば、ご披露いただきたい。お願いします。

**マッキンストリー** 次の計画があったらいいなと思います。芸術の図書館をつくる計画があるかもしれません。時期尚早なので、いずれにしても計画ということです。しかも、音楽、演劇、芸術、もしくはおそらく建築も一緒に統合した図書館にする計画かと思います。私は仕事の時間の多くを、図書館外からの資金集めに使っています。

**司会** それではそろそろ終了の時刻になりました。今日は皆さん、活発なご質問を出していただいてありがとうございました。司会をやっていて大変楽でした。すばらしい報告をしてくださったマッキンストリーさんに感謝の拍手を、皆さん、お願いします。

**マッキンストリー** 皆さんにも拍手を送りたいと思います。(笑)

**司会** それでは閉会の挨拶を、本学図書館長の公文がいたします。

**公文** 長時間にわたり、マッキンストリーさんの報告と意見交換をすることができました。皆さん、本当にありがとうございました。マッキンストリーさんに日本に来ていただいてお話を伺いたいと考えたのは、私どもの大学で図書館職員が図書館の中にいるだけではなく、外に出かけて行って学生に対する新しいサービスをしていきたい。そういうふうを考えて、これまで実行してきました。そこで改めて海外の進んだ経験をお聴きしたいと思ひまして、マッキンストリーさんに来ていただいてこういう講演会を催しました。

今日は「21世紀の大学図書館」というテーマで、マッキンストリーさんに大変内容のある、新しい大学図書館のあり方、学部図書館のあり方を教えていただいて、私も大変勉強になりました。ありがとうございました。

**マッキンストリー** 私も多くを学ぶことができました。ありがとうございました。

**公文** そして、今日お集まりいただき、オブザーバーとしてセッションに参加していただいた皆さんにもお礼を申し上げたいと思います。

実は今日お集まりいただいた大学の図書館長、事務関係の方々は山の手コンソーシアムというものをつくっていて、お互いに本の貸し借りをしたりしている大学です。日ごろから協力関係にありますので、今日はお忙しい中、参加していただき、皆さん、本当にありがとうございました。お礼申し上げます。それでは、今日の講演会はこれで終了したいと思います。皆さん、本当にありがとうございました。

**司会** 一つアナウンスします。マッキンストリーさんを囲む懇親会を、6時からボアソナードタワーで行います。法政大学の図書館員がご案内しますので、一緒にこれから移動してください。申し込みをされていなくても、今日の雰囲気が大変よいので出たくなつたという方は遠慮せずにどうぞ参加してください。

以上